

「男、突っ走る！」

第74回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (23)

『オフィスツリーイン』代表

国枝 佐代子 (58)

市民映画プロデューサー

山中 敦夫 (43)

劇団主宰者

本田 晴臣 (54)

音楽プロデューサー

田所 俊子 (62)

市民映画プロデューサー

橋崎 悟 (48)

WEB会社社長

橋岡 直政 (46)

舞台俳優

野倉 浩太 (21)

オーディション参加者

石井 麗子 (24)

オーディション参加者

前川 啓司 (29)

オーディション参加者

富永 茜 (22)

オーディション参加者

花坂 美忍 (23)

オーディション参加者

大坂 美央 (16)

オーディション参加者

佐藤 麻美 (21)

オーディション参加者

河辺 真理恵 (21)

オーディション参加者

長野 優美 (17)

オーディション参加者

1 北公民館・全景

2 同・会議室

N 「オーディションの二日目が開催され、この日は国枝さんがプロデューサーを務めた市民映画に出演していたという野倉浩太さん一人が、オーディションに参加しました」

オーディションが開催され、審査員席に座る佐代子、山中、本村。その前に立っている野倉浩太（21）――後ろの受付席で控えて様子を見ている雅也、田所、橋崎。

浩太「野倉浩太です。今回、国枝さんからお声がけをいただき、オーディションに参加させていただきました……」

N 「そして、翌日のオーディション最終日は……」

3 中央公民館・全景（翌日）

N 「駅前の中央公民館で開催されたのですが、

参加者が八人という大所帯になったのです」

4 同・会議室

雅也、田所、橋崎が受付の設営に追われて
いる――審査員席で打ち合わせを
している佐代子、山中、本村。

と、舞台俳優・橋岡直政（46）が入
ってきて、

橋岡「失礼します」

雅也「オーディション参加の方ですか？」

田所「はっしー！」

橋岡「田所さん、ご無沙汰してます」

佐代子と本村も気づいて、

佐代子「はっしー、今日はありがとう」

本村「久しぶりだね」

橋岡「今日は、よろしく願います」

雅也「（驚いて）この方が、橋岡さんですか」

佐代子「そうよ。（と橋岡に）運営事務局を

やってくれてる木内君と橋崎さん」

雅也「木内と言います」

橋崎「橋崎です、よろしくお願ひします」

橋岡「僕、橋岡です。よろしくお願ひします」

雅也「(田所に)あの方ですよね、名古屋の

劇団にずっと所属されて、いくつもの舞台

公演に出演したっていう」

田所「そうよ。コミカルなお芝居も、クール

な芝居もできてね。今日の演技審査の時、

どんなふう演技してくれるのか楽しみだわ」

不思議そうに橋岡を見る雅也。

N「午後一時になり、オーディションが始まりました」

×

×

×

オーディションが開催され、審査員席
の前の椅子に座っている参加者たち――

――中学教師・石井麗子(24)、アル

バイター・前川啓司(29)、大学

生・富永茜(22)、アルバイト・

花木忍(23)、高校生・大坂美央

(16)、大学生・佐藤麻美(21)、

専門学生・河辺真理恵(21)、高校

生・長野優美（17）の顔ぶれ。

N「この日の参加者も、なかなかの強者揃いで……」

以下、各自自己紹介の一部をカットバツク。

× × ×

麗子「石井麗子と言います。普段は地元中学校で英語教師をしています。小さい頃からミュージカルが好きで、今回市民ミュージカルのオーディションがあることを知り、応募しました」

× × ×

啓司「名前は前川啓司です。東京のサワムラプロダクションの養成所で演技を学び、ドラマの端役ですが出演させていただいたことがありません」

× × ×

茜「富永茜、二十二歳です。演技経験はありませんが、大学の友人たちと趣味でバンドチームを組んでいて、ギターを担当してい

ます」

×

×

×

忍「花木忍です。高校の時、演劇部に所属して
いました。今回、ボランティアエキストラ
ラでよくご一緒している田所俊子さんから
ご紹介していただき、参加しました」

×

×

×

美央「大坂美央です。高校一年生です。中学
の時、吹奏楽部に入っていて、高校では演
劇部に入りました」

×

×

×

麻美「佐藤麻美です。私は、国枝さんや田所
さんがプロデューサーを務めた市民映画で
ヒロイン役をさせていただき、そこから演
技に興味がわき、大学生になった今も、た
まに名古屋の舞台でお芝居をしています」

×

×

×

真理恵「河辺真理恵と言います。今は歯科衛
生士の専門学校に通っています。高校の時
に、市民劇に出演させていただき、またミ

ユージカルも大好きで、今回ぜひ出演できたらと思います、エントリーしました」

× × ×

優美「長野優美、高校二年生です。長久手市の市民ミュージカルに出演させていただきました、高校では演劇部に所属しています」

× × ×

唾然顔で参加者たちを見ている雅也。

N「とにかく、ほぼ何かしらの経験をしている人の寄せ集めとなってしまうたのです。これは審査も悩ましいところだと、ふと感じた僕でした」

× × ×

演技審査が行われている——雅也と茜がテスト用台本を見ながら芝居をしている。

N「女性参加者が多く、男性の負担をなるべく減らすために、急遽僕も相手役として駆り出されることになり、経験者たちを相手にド素人の演技を披露するという、とんで

もない公開処刑の場となってしまうので
した」

× × ×

演技審査が行われている——麻美と橋
岡がテスト用台本を見ながら芝居をし
ている。

橋岡の声と演技力を見て、圧倒してい
る雅也。

N 「噂通り、橋岡さんの演技力、そして舞台
特有の声のボリュームに、僕は思わず圧倒
されてしまっていました」

× × ×

オーディションが終了し、それぞれ会
積しながら去っていく麗子、啓司、茜、
忍、美央、麻美、真理恵、優美——
「ありがとうございます」と見送り
をする雅也、田所、橋崎。

× × ×

N 「そして、オーディションが終わると、そ
のまま審査会議が行われました」

会議用のテーブルが四角上に並べられ、
審査会議が行われている――それぞれ
の席に座る雅也、佐代子、山中、本村、
田所、橋崎、橋岡。

山中「どうしましょうね。僕の今の台本では
男子三人、女子三人という六人。男子は、
サクラで参加した木内君以外の藤田君、野
倉君、前川君で良いと思えますけど」

雅也「僕もその意見に賛成です。男子は僕以
外の参加者三名で」

佐代子「……」

山中「女子の人選が難しいですよね」

本村「バンドやってるっていう、富永さん。

彼女は良いと思うけどね」

山中「楽器やってますから、何となく表現力
のコツは分かっているとと思うので、演技力は
稽古を重ねていけばカバーできると思いま
すけど」

田所「（橋岡に）はっしーは、相手役やって
てどう思う？」

橋岡「そうですね。これはお世辞抜きで、女性陣はみんな基本的な演技は問題ないと思いました。初日にも、詩吟経験者や高校で演劇部に入ってる子がいるって聞いてますが、まあその子たちも含めると、ここから三人に絞るのは難しいですね」

橋崎「ビジュアル的にも、みんなメイクすると織姫似合いそうですね」

山中「国枝さん、どうします？」

佐代子「私……考えたんですけどね」

山中「……？」

佐代子「現状、脚本を進めてもらってるヤマさんにはすぐく申し訳ないことなんですけど」

山中「良いですよ。審査会議ですから、何か思いやお考えがあるならこの場で。運営メンバーも全員揃ってますし」

雅也「（怪訝そうに）……？」

佐代子「今回、約二カ月近くの告知の中で、十三人の若い子たちがオーディションに参

加してくれました。SNSの投稿や新聞記事を見て、興味を示して来てくれたことは、私にとってはすごく嬉しいことなんです。今回出会った縁を、私は大事にしたいと思っています。なので、これは私のわがままで申し訳ないんですけど、参加者全員を合格にしたいと思っています」

雅也「……！」

佐代子「（山中に）十三人分に登場人物を膨らます負担があることは百も承知ですが、私はこの参加者全員を舞台に立たせてあげたいと思っています」

山中「それがプロデューサーの想いなら、私はそれを組んで、脚本直しますよ。直すのも仕事のうちですから」

佐代子「ありがとうございます」

雅也「あのッ……！（と思わず立ち上がった）全員合格にするってことは、サクラでオーディションを受けた僕もってことですか」

佐代子「そういうことになるわね」

雅也「そういうことって……僕、とてもじゃないですけど……」

山中「確かによくよく考えてみれば、メンバーと運営のパイプ役があったほうが良いかもしれない。木内君なら、ちょうどメンバーとも同年代だし、運営事務局もやってる。ちようど良い人選かもしれないね」

雅也「ええ……。でも、一つ良いですか。僕は演技力も歌唱力もないですし、ダンスなんて体育の授業でやったソーラン節ぐらいしかできないんですよ。舞台なんて、最後に立ったのは小学校六年生の学芸会です。とてもこんな経験者ばかりの中に、僕みたいななど素人が紛れ込むなんて。それに、本番はマイクも使わないとなると、あの中央交流センターのホール二百五十人の席で、僕の声が届くわけないじゃないですか。今日の橋岡さんの演技力と声量で、いかに自分の声がか細いかを実感したんですから」

山中「不安な気持ちは分かるよ。誰だって最初っていうのがあるんだ。俺も最初は演劇のことなんて何も知らないところからスタートして、そこから数を踏んで今があるんだ」

雅也「……」

田所「演技力の心配も分かるけど、まずはこの市民ミュージカルが円滑にいくためには、まあ管理職とまでは言わないけど、運営とメンバーの間に入る調整役の人が必要になってくると思うのよ」

雅也「板挟みってことですか？」

田所「まあ言い方悪いとそうなるかもしれないけど、私たち上の世代が若い世代の中に入って調整するのは意外と難しいのよ。そういう面では、メンバーとして一緒に輪の中に入ったほうが、他のメンバーたちも私たちに相談しにくいことでも、木内君なら話せるってことだってあるかもしれないわよ」

本村「確かに、木内君なら相談しやすいかもね。聞き上手そうだし」

雅也、じっと考える――しばらく沈黙が続く。

雅也「……分かりました。メンバーと運営の掛け持ちは大変かもしれませんが、頑張ります」

佐代子「良かった。これで、万事上手く行くわね」

橋崎「じゃあ早速メンバーたちへの合格通知書作りますね」

佐代子「お願いします。（と橋岡に）ねえ、はっしーも良かったら出てよ。経験者が一緒の舞台に立ってくれたら、良い意味で締まると思うんだけど」

橋岡「もちろん、国枝さんの頼みとあらば」

佐代子「ありがとう。頼りにしてます」

大きく溜息をついて着座する雅也。

険しい顔をした雅也が階段を下りてくる――

ラウンジの椅子に山中が待っている。

雅也「（気づいて）ヤマさん……」

山中「飯でも行くか」

雅也「……」

6 ファミレス

雅也と山中が話している。

雅也「……」

山中「（苦笑して）そんなに気にしてたのか、

経験者の子たちと舞台に立つことが」

雅也「当然じゃありませんか。まさか僕があ

の人達と一緒に舞台に立つなんて……」

山中「経験者って言っても、高校生や大学生

となると数年のキャリアだろ。俺から言わ

せれば、そんなに大した差はないよ」

雅也「いや、それでも高校演劇で二年や三年

経験してる人は、ある程度舞台の勝手だっ

て分かるでしょ。でも僕は、そういうこと

も分からないんですよ。よく運営会議の時

に、ヤマさん専門用語使うじゃありませんか。だから僕、議事録用でメモしてるので、後でこっそり用語の意味調べてるんですから」

山中「そんなことしてたのか？」

雅也「だって議事録作るのに、言葉の意味も分からずただ記録として書くのは納得できないですもん。ちゃんと意味を知ったうえで、どういう意図があって意見を出したのかをまとめたいですから」

山中「さすがはライターだね。そういうところ、抜かりないんだ」

雅也「運営のことは良いんですよ。ただ、本当に自分がパイプ役になるのが重圧で」

山中「でも、最終的にはやるって自分の口で言ったじゃないか」

雅也「そうですね。だから、やるからにはちやんとしなきゃって思うんですけど、ただそうやって考えれば考えるほど、プレッシャーになるんですよ。こんなド素人がキャ

ストと運営のパイプ役だなんて」

山中「そういう中間ポジション、似合いそう
だけどね」

雅也「確かに、高校や専門学校頃から、僕
は何かと間に入る、本当に中間管理職みた
いでしたし、場合によっては板挟みになっ
ててんやわんやしたこともありました。ま
さか、ここに来てまた同じような経験をす
ることになるとは思いませんでしたけどね」
山中「初めてのことで、いろいろ不安になる
ことはあるかもしれないけど、パフォーマンス
ーとなる以上は笑顔を忘れないことだぞ」

雅也「笑顔ですか？」

山中「演劇にしても、ミュージカルにしても、
作品のクオリティも大事だけど、やっぱり
お客さんにエネルギーをお裾分けして元気
になって帰ってもらうのが、舞台の上に立
つ者の役目だと俺は思うんだよ」

雅也「……」

山中「俺も、東京で何十回と舞台踏んできた。

主宰もやってたから、当然キャストとしてではなく脚本や演出として裏方に専念したこともあった。どんなポジションにいても、やっぱり一つの舞台が終わって、観客の人たちが『感動した』『元気をもらった』『面白かった』ってアンケートに書いてくれると嬉しいもんなだよ。本来エンタメってというのは、感動も当然だけど観客の心を動かすのが一番重要なんだよ」

雅也「観客の心を動かす……」

山中「木内君だって、自分の書いた文章とか、自分が脚本を担当した作品を見た人が笑ったり泣いたり、いろんな感情を出してくれど嬉しいだろ。ポーっと見て『つまらん』って言われることを考えたら」

雅也「もちろんです」

山中「それと一緒にだ。自分たちで作り上げてきたもので、どれだけお客さんの心をつかめるか。クリエイティブな仕事してる木内君には、そういう素質があると思う」

雅也「演技力ないのにですか？」

山中「それは俺がカバーするよ。見る限り、木内君は吸収力ありそうだから、みんなと一緒に稽古を重ねていけば問題なく舞台に立てるって俺は信じてる」

雅也「……」

山中「それに、オーディション参加者全員を舞台に立たせると決まった以上は、みんながそれなりの芝居ができるようにしてあげることが、俺の役割だからな」

雅也「脚本も一から書き直しですし、舞台における脚本や演出も大変ですね」

山中「しようがないよ。オーディション参加者全員合格っていうのが、主であるプロデューサーが決めたことなんだから」

雅也「そうですね」

山中「正式なキャスティングはまた決めるけど、おおよその当て書きはしとこうかな。特に男子ははっしー入れて五人だから、イメージしやすいし」

雅也「当て書きって、僕のイメージに合う役なんてありますか？」

山中「また、楽しみにしてなよ」

雅也「はあ……」

山中「あまり抱え込まないことだよ。リラックスして、あのメンバーと一緒に楽しむこと。木内君なら、メンバーたちとすぐに溶け込めて、仲良くできそうな気がするけどな」

雅也「まあ、人とすぐ仲良くなれるのは、昔からの特技というか、何というか」

山中「これはまた国枝さんと相談するけど、メンバーの中のリーダー、木内君にお願いしようかと思ってる」

雅也「僕が……リーダー……」

山中「国枝さんから他の人って言ったら、その意見は甘んじて受け入れるつもりではないけど」

　　啞然顔の雅也。

7 木内家・雅也の部屋（夕・一週間後）

パソコンで事務作業をしている雅也。

N 「オーデイション翌日には、参加者全員に合格通知が渡り、一週間後にはメンバーの顔合わせを行うことになりました。当然、僕にもその合格通知は運営会議の時に国枝さんから直接渡され、僕は思いがけず市民ミュージカルに出演することが決まったのです。迷った末に最終的には自分で決めたことなので、とにかく頑張るしかない思っていました。顔合わせを翌日に控えた、その日の夕方のこと……」

雅也のスマホに着信が来る——画面に

『山岡プロデューサー』と表示。

雅也「（電話に出て）もしもし。どうもご無沙汰してます。ええ、今大丈夫です。（と啞然として）え……、非常事態発生……？」

つづく